

学力向上フロンティアスクール取り組み事例

(福 島 県)

- ☑ ①発展的な学習や補充的な学習など個に応じた指導のための教材の開発
- ☑ ②個に応じた指導のための指導方法・指導体制の工夫改善
- ☑ ③児童生徒の学力の評価を生かした指導の改善

I. 学校名及び規模

会津若松立行仁小学校									
	1年	2年	3年	4年	5年	6年	特殊学級	計	教員数
学級数	3	2	2	2	2	2	2	15	20
児童数	63	68	78	62	77	71	10	429	

II. 実践研究の概要

<ul style="list-style-type: none"> ・ 主題（テーマ） 確かな力を身に付け、学び続ける子どもの育成 —T・Tの指導体制を基盤とする個に応じた指導を通して— ・ テーマ設定の趣旨 学力検査（CRT）から見ると、約6割の子どもが十分達成している結果だが、関心・意欲・態度が他の観点に比べやや低くなっている。また、どの子どもすべて基礎・基本を身に付けているとは言えない。子ども一人一人の学習状況をしっかりと見取り、個に応じた指導をさらに充実させ、学ぶ喜びを味わい、生涯にわたり自ら学び続ける子どもを育てる必要がある。

III. 実践研究の内容について

(i) 実践研究の内容

① 発展的な学習や補充的な学習など個に応じた指導のための教材の開発

ア. 開発した教材の概要

第2学年かけ算九九（2～5の段）を確実に唱えたり、かけ算の意味理解を深めたりする単元末の段階の習熟度別学習の教材を開発した。3コースに分け、努力を要する児童にはスモールステップでできる問題→九九ビンゴの流れで全員が確実に乗法計算ができるようにした。おおむね達成している児童に対しては、既習事項のチェック問題をした後、チャレンジ問題としてブラックボックス（乗法の立式の説明）と九九ビンゴに取り組みせ、学習を深めさせた。十分達成の児童には、発展的課題として41点の点字ブロックを教材として与え、ドットの個数を乗法を用いて数える活動を通し、乗法を用いるよさ、かけ算のかたち、その美しさ、数の不思議などに気づかせていった。

イ. 本時における発展的な学習

○ 本時の目標

- ・ 乗法の意味について理解し、被乗数が5, 2, 3, 4の乗法計算を用いて、問題を解決することができる。（表現・処理）
- ・ 乗法九九のよさに気づき、ものの個数をとらえる時に進んで乗法を用いようとする。

(関心・意欲・態度)

○展開過程

段階	学習活動・内容	時間	指導上の主な支援	○学力向上に関わる手立て ● 評価
課題把握	1. 本時の課題を確認する。 2～5のだんのかけ算めいじんになろう。	5	○ これまでの学習を振り返りながら、本時の学習への意欲を高めていくようにする。	○ 「○のいくつ分」という乗法の場をしっかりと理解しているかどうか確認していく。
	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 5px;"> ・ 乗法の意味 </div> 2. 解決の見通しを立てる。 ・ 乗法が用いられること ・ ドットの数	5	○ 2人組みでカードを用いて乗法の意味についての理解を確かめさせていく。	
計画	3. 各自の方法で課題解決をする。 ・ ドットの数の求め方 ・ 乗法の意味	20	○ 全部の数の予想や個々の直感的な発想のよさを取りあげていくようにする。	○ 実物の点字ブロックを見せ、かけ算を使うことができることをおさえ、解決への意欲を高めていくようにする。
	4. 各自の解決の方法について発表し、話し合う。 ・ ドットの数の求め方 ・ かけ算のかたち		○ なかなか○のいくつ分と見ることができない子を中心に支援し、1つ分を決めて乗法を使うことができるよう支援していく。 ○ 早くできた子には、シールをはらせるなどして発表の準備をさせていく。	
まとめ	5. 本時の学習を振り返り、単元の学習のまとめをする。 ・ 次単元の予告	10	○ 個の考えを生かしていくような発表をさせていく。	○ ものの個数をとらえる時に乗法を用いるよさ、かけ算のかたち、その美しさ、数の不思議などについて個に応じて気づくことができるよう配慮していく。 ● 話し合いにより、乗法九九を用いてももの個数をとらえるよさに気づいたか。(発表・ふりかえりカード)
		5	○ 奇数の数の和が正方形になることを磁石を用いて知らせ、その不思議さに関心を持たせていく。 ○ 振り返りカードの記入の様子を見取り、声をかけるなど個々のがんばりを称賛していく。	

② 個に応じた指導のための指導方法・指導体制の工夫改善

○ 小学校における教科担任制の取組状況

第6学年の算数・理科・社会を教科担任制とした。算数は、2名のT・T担当がそれぞれに1クラスを担当し、T・Tの授業も行うことができるようにした。また、理科・社会は、2名の担任の交換授業とし、課題別などの必要に応じて1クラス最大3Tで授業を行うことができる体制をとり支援してきた。今年度の反省をもとに、来年度は、5・6年で実施できる体制を計画之中である。

③ 児童生徒の学力の評価を生かした指導の改善

全学年の算数科と6年の理科・社会の単位時間の評価規準や評価基準(達成基準)を作成し、それに到達できるような指導を行っていかうとした。具体的には、一単位時間で1～2観点評価することとし、4観点から重点化した評価規準、評価基準(達成基準)を設定し、単元の中で、バランスよく評価していくこととした。また、算数科の関心・意欲・態度や数学的な考え方などの評価については、質的な見取りのほかに、行動リストを作成し、どの程度できたか量的な見取りをしていくよう工夫した。今年度中に、全学年・全教科の評価規準、

評価基準（達成基準）を作成予定である。

評価規準・評価基準例

月	時	目 標	学 習 活 動	おもな評価規準
(1) 倍数と公倍数				
4月	1	【プロローグ】		
		・p. 2の図を示し、整数の並び方について気がついたことを話し合い、整数についての興味・関心がもてるようにする。		
	2	○「倍数」の意味とその見つけ方を理解する。 ○「公倍数」の意味を理解する。	・カスタンネットとトライアングルが同時に なるのは何回目の時か考える。 ・用語「倍数」の意味を知る。 ・用語「公倍数」の意味を知る。 ・数直線上で公倍数を見つめる。	歯 A 整数を倍数、公倍数の観点から分類し、その性質を説明している。 B 数直線から、倍数は規則的な間隔で限りなく存在することをとらえている。 歯 A 倍数、公倍数の性質をもとに、倍数、公倍数を求めることができる。 B 倍数を求めることができる。 歯 A 倍数、公倍数の意味がわかり、倍数、公倍数は無限にあるなど豊かな感覚を身に付けている。 B 倍数、公倍数の意味を理解している。
3	○公倍数の見つけ方を理解する。 ○「最小公倍数」の意味を理解する。	・4と6の公倍数の見つけ方を考える。 ・用語「最小公倍数」の意味を知り、最小公倍数を求める。	歯 A 効率よく公倍数を求める方法を考えようとしている。 B 公倍数を求める方法について考えようとする。 歯 A 最小公倍数の意味がわかり、公倍数は最小公倍数の倍数であるなど、豊かな感覚を身に付けている。 B 最小公倍数の意味を理解している。	

行動リストを活用した見取りの工夫・・・これまで主観的だった評価を行動の形に表し客観的な、量的な見取りをしようと工夫した。

個人チェックリスト 5年 (平行四辺形と三角形の面積) 名前 ()

時間	観点・方法	評価基準 行動リスト (関・考のみ2～3でA)	評価
1	関 (観察・カード)	<ul style="list-style-type: none"> これからの学習内容を理解し、今後の学習の見通しをもっている。 自分の学習の取り組みのタイプがわかる。 レディネステストなどから自分に合ったコースを選ぶ。 	
2	関・考 (観察・ノート)	<ul style="list-style-type: none"> 既習の公式などを活用して面積を求める。 2通り以上の方法で面積を求める。 多様な考えのよさがわかる。 	
3	考 (観察・ノート)	<ul style="list-style-type: none"> 多様な考え方の共通点を見つめる。 公式につながる考え方を見つけ、公式を作り出す。 底辺と高さを確実にとらえる。 	
	知 (小テスト)	・ 80 パーセント以上正答でA	

(ii) 成果と課題

○ 成 果

- ・ 学力検査 (CRT) の結果、算数は全校で A 段階が 64%から 72%に、B 段階が 28%から 22%に、C 段階が 8%から 6%に変容し、学力の向上が見られる。
- ・ 学力検査の「算数への関心・意欲・態度」の観点が、どの学年も大きく増加し、80%を超える高い得点率を示している。特に算数を教科担任制とした 6 年生は、56%から 83%に増加している。「算数学習のアンケート」からも、算数の学習を「好き」「まあまあ好き」と答えた子どもが 60%から 65%に、「嫌い」「あまり好きではない」と答えた子どもが 16%から 13%に変容し、意欲の高まりが見られた。

○ 課 題

- ・ 学力検査の結果、「数学的な考え方」の観点が、どの学年も他の観点に比べて低くなっている結果であった。さらに、「数学的な考え方」に重点をおき、評価を生かした指導や個に応じた指導を充実していく必要がある。
- ・ 教科担任制を 5・6 年で実施できる体制作りをすすめていく必要がある。

(iii) 成果の普及方策

- ・ 平成 14 年 10 月 18 日 (金) 自主研究公開発表会
- ・ 平成 15 年 10 月 17 日 (金) 自主研究公開発表会予定

